

戦争を越え、一世紀を超えて

福島県 藁谷 はるの

私は明治二十六年三月二十七日宮城県志波姫町 土族大川清藏母アキノの四女として生まれ今年(平成五年)満百歳となりました。家族は祖父敬藏(八十九歳死亡)がおりましたが祖母は早死にしておりますでした。

祖父は厳格な人で私は子供なのに女大学というものを教えられました。子供で何もわからなかった。よくかわいがってもらったことを覚えています。

父はまじめな人で、町の神社総代や水田水管理総代を永年勤めており、母は永年名誉村長を勤める名家鈴木家の生まれで嫁に来る時下女を連れてきたとのことです。

母も厳しい人でした。私は兄弟姉妹のうち、一番小柄で身体も弱かったので小学校に入学したころ、毎日、母がおんぶして連れていってくれました。

みんなに赤ちゃんだと笑われるので友達と一緒に登校するように母が気を配ってくれたようです。

町は付近に伊豆沼、長沼があり、白鳥の飛来地として有名であり広い面積の自作農でしたので子供の時から、手伝いをさせられました。明治三十七、八年、日露戦争に長兄萬藏が二百三高地の激戦で戦死したので、奉天大会戦で戦功をたて、凱旋して来た清五郎を姉キヨノの婿に迎え大川家を継ぎました。

明治三十八年は東北地方は大凶作で南京米やロシア黒パンなどを配給されましたが、私の家では、祖父の代に救荒用にと火棚の梁の上に俵に入れて貯えておいた八石(ハトムギ)を粉にして食べさせられましたが、とてもおいしいと思いました。

私は水田作業をしてもみんなより遅く、いつも後になるし、ヒルに吸い付かれたり、腰をかがめての田の草取りは、太陽に頭を照りつけられると、目まいがす

るので水田作業が大嫌いでした。

与野市の機屋に嫁に行った姉のところの手伝いに行きましたが大病を患い、回復後実家に帰りましたが、水田農家に嫁に行きたくないので仲人話を断り続けていた時、北海道で開拓作業などを請負い景気の良い叔父が人夫を募集に来て、私の家を訪ね、土産に北海道馬一頭をくれました。私は叔父に連れられ渡道し中標津町で木材業の蘆谷松吉と結婚し、大正三年六月長男特男を出産しました。

この年第一次世界大戦が起こり、日本は連合国側につき勝利し、その後欧州復興のため日本からも農産物が輸出され北海道では豆、ハッカ、澱粉など高価で売れ、思わぬ大金が入り成金ブームで、好景気にわいておりました。

大正八年には、シベリア出兵、大正十二年九月一日関東大震災で多くの家屋が焼け、死傷者も多数に及び大災害でした。

夫松吉は木材業を営み、山より港に出し、満鉄枕木や船材などを輸出し、事業も順調でした。

仕事上、夫は外出が多かったので私は子育てと六町六反の土地を耕作し、馬や乳牛を飼う人を頼んで畑作りもやりました。

昭和に入り不景気風が吹き、日本経済は悪化し、金解禁を行った浜口首相は暗殺され、他にも政財界の悪人が殺害されました。

更に上海事変、満州事変と大軍国日本は軍費が多くなり、国内では冷害凶作に見舞われ、農村は疲弊し、工商業も世界的不況で苦しみ、巷には失業者があふれ、当時はどこの家でも大家族だったので餓死をのがれるため娘を売ったり男の子は口べらしのため小僧奉公に出され暗い日々でした。

昭和維新を唱える青年将校たちによる、昭和十一年、いわゆる二・二六事件が起きました。

その後、政府は独立国となった満州に日本人を大量に送り込み、特に若者は、男女ともに、大陸満州に活躍の場を求めようになりました。

長男特男も大陸の新天地満州で活躍したいと言い出し満鉄東京事務所に手紙を出し、「現地採用するか

ら渡満して受験しなさい」との返信があった。

新聞では毎度満鉄社員が捕えられ、身代金を要求されたたり、殺されたりとの報道があり、とても賛成出来ませんでした。

しかし息子の決心は変わりません。

夫は、何からの方策はないかと「いわき市」の親類や役場、恩師を訪ねて相談したところ、村長さんは「昭和十二年に初めて福島県民だけの開拓村を建設するので、今、先遣隊員四十人を募集している。開拓団は団として集団しているので身の危険は心配ない、安全だから」と説明をうけ、開拓団員として渡満することを許可しました。

息子は採用試験に合格、矢吹修練農場の訓練を終わり、昭和十二年渡満、佳木斯市の対岸、蓮江口村に入り、建設にかかりました。

団は、佳木斯市に牧場を作り、牛乳搾取処理販売を営み、息子は牧場長となりました。

その後、団より牧場を譲り受け、個人経営となりこの買収資金が必要となったこと、団の土地住宅も決

まったこと、二男保三が昭和十四年一月満州独立守備隊に入隊し、除隊後は満州で就職するとの希望であることなどから、昭和十四年全財産を処理して家族全員が渡満することになりました。

途中私の実家に立寄ったら義兄清五郎（奉天大戦出征）に「満州は良い所だ。しっかりやりなさい」と励まされ、四月七日佳木斯駅に着きました。八日同行した息子の嫁チエ子を息子の牧場に残し、松花江の結氷上を歩き、蓮江口に迎えに来ていた団のトラックに乗せてもらい福島村開拓団開盛屯に到着しました。

二十戸の部落で周囲は濠と土壘で、鉄条網が張りめぐらしてあり、大戸門から出入りするようになっており、家に入ると床の間に新品の銃や銃剣、弾薬があり、身のひきしまる思いで一杯でした。

日本では満州の地図を日本と同じく赤色に染めて満州は日本の生命線といていたが、現地に入ってみると、ここは異国なのだと強く肌に感じました。

部落民は息子と同じくらいの年ごろの若夫婦でにぎやかなうえ、老人は私たちだけなので、おじさんおば

さんと声をかけてくれ、多分、日本の父母をしのんでのことと思われ、心も和やんできた。私は野菜班、夫は農耕班に参加したが、大陸農法になれず成果は今少しでした。

翌年私たち一家は、個人経営に移り現地人を雇い土地肥沃なうえ、気候も良いので無肥料で多量の収穫があり野菜類は軍隊との契約で収入も安定しておりましたが、夏の炎熱、冬の零下三十五度以上の酷寒は、本当につらく日本に帰ろうかと何度も思いましたが、長男夫婦に子供が出来、孫の子守りや私の末の子が学校に上がったり長女を団内の迎家に嫁に出したりと自然とこの土地になじんで行きました。

鳥獣魚類も多く、雉子、雁、鶴、鹿（ノロ）、兎、狼、魚では大鯰、イトリ、鯉、スッポンなどが、家の前の畑や裏の大池、川にとても多くいましたが、魚は骨が硬く泥臭いので料理するのが嫌でした。

現地の人は、なぐられるのを大変いやがりましたが、若い団員の人には暴力を振るう者もあり、しかし私たちは働いてくれる原住民にはやさしくし、労賃もきち

んと払うので原住民からも好かれ、こちらでも何かと良かったと思います。一度大雨が続き、松花江が洪水となり、草地や畑は見渡す限りの海のような水浸しとなり上流、小興安嶺の山で伐採された大きな丸太が多数流木となって江岸に漂着し、水が引くと、そこそこにゴロゴロと転がっており、天の恵みと拾って使った人もたくさんおりました。

三十年くらいに一度の水害は、上流の沃土を運んでくれるのだと原住民は言っておりました。

このため三十年ぐらい作っても無肥料でも良く収穫があがるのだと思われました。

一度硫安が配給されましたら原住民は「薬」だと言ってお日頃化学肥料に縁のない土地柄で誠に「素朴」さを感じました。

その後昭和十四年入隊した二男保三は、ノモンハン事変に参戦しましたが無事凱旋し、十七年除隊となり佳木斯市の隆泰号会社に就職し、実家より姉の子トヨ子を嫁に迎えた。

三男好員モンケウが満鉄電機区に入社、二女「ますよ」が軍

のタイピストとして就職し順調に年月が過ぎました。

しかし、昭和十六年十二月八日対米英仏蘭との戦争に突入し、初期の戦果もむなしく、次々と敗戦、苦戦、関東軍からも南方に転進し、その穴埋めに在満邦人が召集され、十九年三月長男特男も国境守備隊に入隊し続々と開拓団の元気な男に召集がかかり男気のなくなった開拓団では、女が銃をとり、治安を保ちながら原住民を使い農作業に当たり、軍納野菜などを作って納めておりましたが、二男も召集され、私と夫は嫁や子供、孫たちの世話をしながら息子の留守を守っておりました。

昭和二十年八月九日「ソ連軍侵入、即刻避難せよ」
「一週間くらいの食糧を持って蓮江口に集まれ」との警察からの命令が伝えられた。

私たちは早速荷物をまとめると共に煎り米、煎り豆を作り、米、布団、衣類などを馬車に積み、子供を乗せて雇人の「薫永泰」に付添われて部落の人たちと出発し蓮江口に集まると、警察署の日系警察官が来て、所持していた銃、弾丸をとりあげ、また十八歳以上の

男は緊急召集され部隊に行くように振り分けられた。

女と老人、子供たちは福隆駅より列車に乗るようお願い、西へ向かう福隆川の橋が大水で流されており、馬車は渡れないので荷物を一旦降ろし、空車にして馬を川に入れて泳がせ渡河し、荷物はつないであつた小舟で何回にもわけて渡した。馬が多いので、中には河に入るのを嫌がる馬もおり時間がかかり暗くなつてしまった。

また、夕方から大雨となりビシヨぬれになり福隆駅に付いた時は寒さと疲れで私は失神してしまい、夫は満人より薪を買い焚火をして温めてくれたので、やっと気付きました。

夜はみんなで野宿する。翌日列車が来たが軍人軍属などで満員で乗ることが出来ない。

こんな混乱の時には、身一つでも乗れないのに荷物を持つての乗車は駄目だといわれ、折角持つて来た荷物を二束三文で仕方なく買ってもらった。雇人薫永泰さんには日本馬三頭と馬車を持たせて帰らせ、一週間過ぎて私たちが帰らない時には牛馬、穀物、農機具

はかみんな処分して良いと言うと泣きながら別れて行った。

その次の日も満員列車で乗れず野宿、次の日に来た貨物列車に乗せてもらったが、一寸の「すき」もないくらいぎっしりで身動きも出来ない状態でした。途中、南又^{ナグ}駅という山の中の小さな駅に下車させられ野宿、今日も大雨に見舞われ駅警備の兵隊さんが焚火をしてくれて助かった。ここらまで来ると疲労と栄養失調で初生児で死ぬ者が多く、線路の脇を掘り、埋めるより仕方がなく、また子供に死なれ、発狂した母親もありました。

皆、無我夢中で涙もかかれたような状況であった。若い母親が幼児二人を背負い一人を抱いて余裕もなかったようなので、何にもしてやることも出来ず、せめて冷たい水ぐらい飲ませようと汲んで来ると、少し大きい子供が競い合って飲んでしまうありさまでした。

八月十五日綏化飛行場に着き格納庫に寝泊まりすることになりました。

満人やソ連兵の略奪、暴行が日夜あり、少しの油断

も出来ない不安の日々が続いた。

食糧はコーリヤンが少量配給されたし、日中は満人がトーフや饅頭を売りに来たり、なんとか空腹をしのいで生き続けました。

こうしている時、長男特男の牧場で働いていた趙文遠さんがハルビンから訪ねて来て「掌貴^{ジヤンキ}(主人特男)は帰っているか」と聞くので帰ってないと言うと、「この生活は大変だろう。私が責任を持って、守るから私の家に来るように」と言ってくれ一家の者は皆感激をしました。しかし集団と一緒にいたいからと言って、好意を丁重に断りました。「では元気で頑張って日本に帰れるよう祈っています」と言いながら手を取り合って別れて行きました。特男が牧場で使用人に尽くしたことを忘れず、わざわざ探りあててくれた誠意は日本人では出来ないことと痛感いたしました。ここで日本が無条件降伏し、関東軍も武装解除されたと聞き、深い悲しみと、今後の不安にかられ夜も眠れませんでした。

昨日まで軍隊を頼りにしていましたが、負けてしま

うと兵隊は女より無力で頼りにならず情けなく思いました。

中国より宋美齡夫人が満州受取りに飛行機で来ました。避難民となった私たちにも出迎えせよとの命令があり、私など日本人は一番後方に並ばされました。飛行場に降りたった夫人は紫の服装で「立派な人だなアー」と感じました。

一か月して新京に移動せよと言われ、貨車につめ込まれて出発したが列車は時々停車したまま動かなくなり、そんな時みんなから金を集めて列車の運行指揮をとる中国人に渡し出発。こんなことを何回もくり返しながら新京駅に着き元日本軍の官舎に入りました。

一人畳一枚の広さもなく、着の身着のままのゴロ寝で、夏の服装のまま寒い冬を迎えることになりました。ここでもコーリヤンが少しだけ配給されましたが、足りないので満人の商店や売人より買って子供に与えました。

私たちは外に出るとソ連軍や中国軍に連行されてしまうので全く無力でした。

私の夫もソ連兵舎に使役のため連行されましたが、寒いので、ゼン息の発作が出たのをうまく利用して大げさにせき込み、苦しそうにしたら女の将校が来て帰された夕方疲れ切って帰って来ました。

私たちは満人の手伝いに雇われたり、機関庫の近くでコークスを拾って売ったり、子供たちは、納豆、トーフなどを仕入れて来て、避難民の仲間に売ったり、時には元軍隊が作った自給野菜畑に野菜を取りに行き満人に鎌で追いかけられ持っていたものを投げ捨て生目がけて逃げ帰りますが老人で足の遅い私は一番後で走りますので、本当に切り殺されるかと夢中でした。

このような生活が続きましたが皆栄養失調となり、伝染病が蔓延し、シラミによる発疹チフスが多く、又赤痢が出て毎日のように子供や老人が死にましたが、男たちはこの死人を吊るのが役目で、寒くなって凍土はツルハンでも墓穴が掘れなくなりみんなが出て大きな溝穴を掘りました。

夫も毎日出役するので、何をするのかと聞くと「自分の入る墓穴だよ」と言い、みんな明日の生命もわか

らない状況でした。

私も高熱に侵され食物がノドを通らず水だけの日が四、五日続き、意識もうすれ、夫は見舞いに来てくれた人たちに「うちの婆さんも駄目だろう」と言う話し声をウツラウツラと聞き、もう終わりか、せめて戦場に行った特男、保三、好員の三人の息子が帰って来て元気な顔を見るまでは死にたくないと思ひ続けました。

幸いにも少しずつ食事も食べられるようになり危機を脱しましたが、逆に一家の柱の夫松吉があつという間に病気になるまで二月七日死亡してしまいました。

五十七歳でした。二、三日は悲嘆にくれ、何をする気力も失いましたが、私がしっかりしなければ子供や孫たち、二人の嫁たちが困るだろうと気力で起き上りました。

しかし、孫数宏六歳、志津子四歳、三女スエ子十三歳の三人が、二月、三月の二か月の間に相次いで死亡し、身心ともに疲れ、失意のドン底の状態で家族で手を取り合い泣き暮れていました。

春が来て体調が回復し、このころ祖国日本への帰還

船に乗船出来るとの知らせが伝わって来ました。帰国準備のため一生懸命働いて支度金を貯めるよう朝早くから夜遅くまで頑張りました。七日になって福島村開拓団の人たちの乗船の順番が回って来てコロ島に向け出発することになりましたが、長男特男の妻チエ子が重病入院中なので二男保三の妻トヨ子に子供たちを連れて帰るよう頼みました。

病人も、「私はもう駄目だからお母さんは老齢で一人になっては大変です。みんなと一緒に帰って下さい」と健気な言葉に私は「異国の地に、しかも避難民で生死をさまよっている時、どうして一人残して行かれるか」と、嫁の手を取り共に泣きました。

私は病人の嫁がよくなってもraitたいと看病を続けましたが、医薬も、ままならない状況で、ついに死亡埋葬し、私はその後残っていたほかの団の人たちと駆逐艦に乗り、帰りました。

祖国日本の山河は変わっていないが広島や長崎の原爆の跡の廃墟には言葉も出ませんでした。交通機関も通信も混乱しており、先に帰国した子供たちを探すこ

とに非常に苦勞いたしました。

まず、開拓民の教育訓練をした矢吹修練農場に行けば手掛りがあるはずと援護会の学生に教えられ、矢吹に行き平山場長さんに会い「一行は県庁に行ったから実家に行ってみるようにな」と言われました。

今なら電話一本で済むが、あの時はスシ詰め満員列車に乗り、足で探さねばならず引揚者の身では大変なことでした。

夫の実家の「いわき市」に行くだけでも帰ってなく、「ゆっくり休んで行け」と親切に言われ数日間体を休めた後、宮城県の私の実家に行ってみると嫁のトヨ子に連れられた子供たちが世話になっており、安心いたしました。

娘の「ますよ」が引揚げの時、手にけがをして病菌が入り、ひどい状態なので、仙台国立病院に入院中で早速私が看病のため付き添いました。

そのうち、三男が「いわき」に帰国し、親戚の家で電気工事請負などを手伝い、喜ばれているから来るように連絡がありました。八月に帰国した福島村開拓

団の人たちから、今度県の世話で「岳」に入植地を獲得したので、シベリアから帰るであろう長男特男さんのためにも参加して欲しいと誘われました。

特男からは、ソ連より無事だと葉書が来ていたので、三男好員など子供と、二十二年四月「岳」で仲間と共同生活をしていた旧軍隊の保養所に着き、炊事当番として働くようになりました。

三男好員はトラックを運転し建築木材などを運搬していましたが、離団することになり、一緒にもう一人の運転手も離団したので、団長は「好員を連れ戻してくれないければ、あんたたちも退団せよ」と言われましたが、好員の居場所も分からないので、困ってしまいました。

親しい友達は一幹部の権力争いに巻き込まれたのだから、出て行つては駄目だ」と言うので県庁に相談に行くと言う幹部連中は前言を取り消して一件落着となりましたが、好員の方まで子供たちに頑張るよう励まし共同作業に精を出し、早くソ連から息子が帰ってくるよう神仏にお願いしておりました。

団では個人住宅の建築に総力をあげ、更に一部開墾にも着手しましたが男手が少なく女子供では四キロもある重い開墾用鍬を思うように振うことも出来ず、成果は遅々として上がりません。冬は炭焼きをやりましたが、あのころは雪が多く、ゴム長靴もなく、みんな大変でした。

昭和二十二年十二月十二日各部落予定地に住宅が出来たので「岳」の保養所から各班に別れて移り住みました。

土地の配分は希望する場所を「くじ引」で平等に決めたので、もめることもなく、希望通りの場所が当たり喜びました。

作業も道路、橋など、全体で行う義務出役の共同作業と、開墾、伐採は個人経営となり、私も子供たちの先頭に立ち、二反歩ほど焼畑簡易開墾をして、南瓜、粟などを作り、わずかながら収穫がありました。

食糧不足のうえ、無理が続いたので病気になってしまいました。こんな時、食糧代替品として砂糖が多量に配給になりましたが、ご飯の代りにならないので、

このままでは体力が弱り病気に負けてしまうので、若柳町の妹のところへ娘をやり、白米と砂糖を交換してもらいましたが帰途警察に「ヤミ米」として没収されてしまいました。娘は涙ながらに「母が病気で食糧にするのです」と言っても「ヤミ屋は皆、そんな『嘘』を言う」と信用されず、泣き泣き手ぶらで帰って来ました。仕方なく与野市の弟より送ってもらった家の造作資金で本当に「ヤミ米」を買い求めました。

十月一日長男特男がソ連より帰って来ました。息子は家族の苦勞と、父や妻子、妹たちを死に至らしめたのは自分の責任と泣いて頭を下げておりましたが、私は息子が無事帰国したことが非常にうれしく、喜びの気持ちで一杯でした。

息子は、しばらくの間、呆然自失の状態で、何にも手につきませんでした。明日の家族の生活を考え、開拓団の共同作業に忙しく従事するようになり、いまわしい体験を忘れ自然と元の開拓者としての心の落ちつきを取り戻し、安心しました。

この冬は特男も慣れぬ炭焼きをやりましたが雪の中、

履物がないので私はワラ靴を作ってはかせたが、この靴は雪が解けると足がビシヨぬれになるので神経痛で苦しんでおりましたが、それ以外に履物は無くみんなワラ靴を履いて我慢しました。

特男は朝は夜明けから、夜は手元が見えなくなるまで開墾に励み、家の回りを開墾し、又伐採、薪切り、丸太山出しと懸命に働き、私も子供たちも一緒に汗を流し、歯を食いしばって頑張りました。

特男が帰国して初めての正月なので餅を腹一杯食べさせたいとまた若柳の妹のところに帰国のあいさつをかね、年賀祝に特男が行きました。

帰りに妹は餅と米をリュック一杯うめこんでくれ列車が国見駅に着くと大勢の警官が一斉取締中で下車させられ荷物の検査をされました。警官にとがめられたが、息子は「開拓団で現地召集されソ連シベリアに抑留され何年も米も餅も食べたことがなく、骨と皮ばかりで、ようやく帰国しても『岳』の開拓地では餅など見ることも出来ないので今年くらい正月らしくもらって来た餅を食べさせて下さい」と真顔で談じ込んだら

上役の人が「ご苦労だった。これから頑張らなさい」と通してくれたと戻って来ました。餅で正月を祝うことが出来、敗戦後の生死をさまよい、明日をも知れない不安の毎日を過ごした避難の時と比べれば、苦しい重労働の開墾作業と食糧や衣服の不足はあるものの、生命の危険もなく家族団らんの一刻を楽しめる幸福を肌で感じました。

息子が心身共に元気になると、みんなに総会で団長に選出されました。

特男は引受けかねているので私は「皆さんに御世話になったのだからお前が、こんどは皆さんを世話して下さい。」と頼んで引受けさせました。特男は遅れていた開墾の促進と営農の確立と収入の確保のため、炭薪用原木の伐採、及び岳地区に失対事業の実施など五十戸の組合員が一戸も脱落せず一丸となって事業を進めるよう、日夜努力を続けました。

特男は団の用で出張外出が多く、家のことは私が先に立ってやらねばならず、息子は私を当てにしています。

このころ、娘は嫁に行き、男の子も外に出て、学校や仕事に就き、特男も再婚したが、嫁は開拓地の生活に慣れるまで、大変苦勞をしたようです。後で息子は酪農組合の再建にも当たり、乳牛導入人工受精、牛乳の生産出荷、乳代金の配分など次々と忙しくなり、私は二人の孫を見ながら牛の乳絞りをいたしました。

開拓団のうち住宅から離れた奥地の方で標高が高く風当たりが強く耕種農業には不適で開墾されず放棄されていた五戸分、山林、防風林まで入れると約二十五町ぐらいあり県より引上げの勧告がありました。

息子は将来、酪農を主とした営農を行うには面積が必要だと先頭に立ち、配分是正、移転組に入り、再び新しい土地に入植、開墾の苦勞をすることになりました。

息子と共に移転した隣の人たちから「ババちゃん大変な所に来たもんだ」と言われ、またつらい毎日を過ごさなければならぬと、暗い気持ちになりました。

しかし、今度は機械開墾で表土が木の根と共に掘り起こされ山や低い所に移され菜でしたが牛の飼料など

は成育せず、四、五年は満足な収穫が得られませんでした。

五戸のうち一戸が離脱しました。

私の家も、三年と一年生の孫が小学校まで遠くなり、雨風や雪で大変だと嫌がりました。

乳牛八頭を頼りに一からの再出発で、家屋建築、開墾地の耕地化、草地造成など息子も嫁も精一杯働き手が堅くなり乳しぼりに手が「シビレ」て何頭も出来ず七十歳になった私も二頭を受け持ち乳しぼりをやりました。

そのころは牛の飼料に紫カブを作っていたので五反歩くらいの間引や雑草取りも一人前に手伝い十二月の雪の中で抜き取り、葉切り、収集して盛り、土掛けなど、厳しい寒さでの仕事は筆舌に尽くし難いものでありました。

孫たちも連れて行き焚火をして寒さをしのいでのつらい労働でした。

息子は大型酪農を目指し、畜舎、車庫、飼料庫、大型機械購入、住宅新築、土地買入れなど次々と仕事を

進めて行きました。

私は孫二人の小中学校への通学の世話や子牛の「はけ掛」の世話などをしていました。

八十八歳の米寿を迎え、お祝いをしてもらう年に、いつの間にか子や孫が遠くから集まり満足でした。

その後酪農作業は全部機械化されたので、私の出番がなくなり庭の草取り、電話番号を受持っていました。

私は車に弱く一分間乗っても一週間や十日間は病人のようになり、床より出られなくなるので外孫のところにも行けず尋ねて来て元気な顔を見せてくれるのを一番楽しみにしています。毎日テレビを友として、特に大相撲が大好きで絶対に見逃しません。

健康の方も幸い、近所に親切な鈴木先生がおられ、すぐ往診していただけるので大変ありがたく、たまに神経痛があるくらいです。去年、郵政大臣と宮沢総理大臣から百歳のお祝金と記念品をいただき、感激いたしました。

私自身波乱万丈の人生で、自分の年齢のことなど考へることもなくただ働くことだけでしたので百歳に

なったのが納得できませんでした。息子から「お上はチャンと調べての事だから間違いない」と言われ、だんだん実感が持てるようになりました。

人生五十年といわれた時代の私が、地獄のような苦しい避難と大病を乗りこえ、人の住めないといわれた「岳」の開拓地に生き続け、家族や地域の人に助けられ、いつの間にか百歳になったのかと不思議に思えてなりません。

私には岳の地は良い水と空気に恵まれた良い環境で親切な人たちに囲まれ長生き出来たと思っております。今年三月二十七日満百歳の誕生日を迎え、県知事様はじめ二本松市長様、県老人会、岳温泉ニコニコ共和国、地区老人会など数多くのお祝を頂き、また子や孫や曾孫、親類友人知人の方たちにおいでいただき、にぎやかにお祝いをしていただき感激を新たにいたしました。

現在、何不自由なく暮らしておりますが、孫敏宇に嫁がないことが唯一の悩みです。一日も早く家の孫に良縁が授かり曾孫の顔が見られるまで、生き続けたい

と思っております。明治・大正・昭和・平成と一世紀にわたり激動の世を百年も生きると、いろいろなことに出合いましたが、敗戦、避難、帰国、不毛地の開墾と艱難辛苦の人生でしたが、今は遠い彼方に忘れ去ることとし余生を楽しんでおります。

私たち二本松市岳温泉福島村開拓地も、永年の汗の結晶で発展し、その後を追うように岳温泉は盛大な観光地となり、一大温泉街のホテルが立ち並び、会社、官公庁の保養所、療養施設、民宿、別荘、遊園地、野外動物園など一切のサービス施設が完備し、夜は満山きらめく灯火の景観は、昔は夢にも思わなかった大リゾート地に変わり、感無量のものがあります。

それにしても異郷の地に果てた肉親の霊に毎日香華を供え、安らかに永眠するよう、合掌いたしております。

【執筆者の横顔】

私は戦後シベリアに抑留され帰国し、開拓者として大玉村に入植し、同じ開拓者として藁谷特男氏は以前

から知っていたが、彼の母が満百歳を迎えたと突然聞き驚いた。

引揚者で開拓者の長寿は誠にめでたいと喜んで訪問し、労苦体験記を書くよう請うたが断られた。しかし家族総がかりで一代記を残すことは意義のあることと説得し了承を得た。

はるのさんは良家に生まれ、それなりの教育も受け、読み書きも十分できるが、何せ百歳の人に何千字も書かせることは酷であり無理であると考え、私と長男特男氏が十日余り順繰りに思い出を語ってもらい、口述筆記したものである。

はるのさんは満百歳を過ぎてても耳も目も口も達者で矍鑠かくたくとしており、日常の生活には何ら支障がなく、庭の雑草取りなどをしている元氣ぶりである。

はるのさんは夫と早くから北海道に渡り事業に成功したが、昭和初めの不況で倒産、一家で満州に渡り、そこでも成功したが敗戦により逃避行となり家族に死別、ただ一人帰国し安達太良山麓で仲間と何もない共同生活を始め、やがてシベリア抑留から帰国した長男

と原始人のような生活で再出発をした。

集団の最年長者として仲間の指導者となり、必死で開墾に励み、戦後開拓の福島村として成功した陰の力として賞賛されている。

元氣な姿を見て、忍従に充ちた百年の人生の歴史が顔に刻み込まれ、その生命力の強さに感嘆し祝福の辞を贈ったものである。

現在は家族に囲まれ、悠々自適、孫や曾孫に会うのが待遠しく、大相撲が大好きでひいきの関取りはいないが、一番も見逃したことがないほどで、開催する場所を待ちこがれている。

引揚者の中で百歳を越える人は数少なく、稀なので是非紹介したいと念じている。

(福島県 立花 開)

満州思えば

福島県 立花 アキ

私たちが渡満したのは昭和十九年四月二十五日、大槻町原畑の家をたった。近所の皆さんに見送られながら満州開拓に出発したのである。郡山駅より上野行き汽車に乗って私たちの仲間団長さん初め八人の団員は、家族を連れた汽車の旅である。アチラコチラを見学して神戸に着いたのは、明るる日の午後であった。

案内されたところは美しい旅館であった。私たち一同が室で体を休めていると、団長さんが来て船の都合で二、三日遅れるとの事を聞かされた。皆さんは伊勢参りに行く人もあれば、神戸の町を見物する人もいた。そして二日ほど過ぎた昼ころ出発の知らせがあった。皆さんは、旅館を後にして歩き出した。町の中をドンドン行くと海の近くに来た。

青々とした水の色、恐ろしい波の音、橋のところ